

新たな魅力づくりで目指す にぎわいと交流のまちづくり

流水がはぐくんだオホーツクの 自然と恵み

本年6月26日～28日、東京のJR有楽町駅前広場で「環境と観光を考えるウイーク」流水からのメッセージ」という網走市主催のイベントが開催された。会場には巨大な流水の塊9個(計10t)とともに、「流水の天使」の愛称で知られるクリオネも飼育展示され、詰め掛けた多くの観客の人気を呼んだ。

同イベントは前年6月に続く2回目の開催である。地球温暖化などの影響下にある流水の現状とオホーツク海の自然環境の変化、網走市における流水と観光のかかわりなどを首都圏でアピールすることで、網走市およびオホーツクへの注目をさらに喚起し、地球環境の保全について全国発信しようとの意図で企画された。

「JR有楽町駅前広場で自治体の主催によるイベントが開催されたのは初めての試みだそ

うですが、おかげさまで昨年も今年も各方面からの注目を集めることができました」

そう語るのは大場脩網走市長である。期間中にはタイアップしたニッポン放送のラジオ番組に出演し、オホーツク沿岸の環境の素晴らしさや流水の現状などについても大いにアピールした。大場市長は、オホーツク海は沿岸諸地域をはぐくむ「母なる海」だと力説する。

「オホーツク海沿岸地域には、網走市をはじめとする北海道網走支庁管内の19市町村があります。オホーツクでは沿岸でも内陸でも個人的で素晴らしい自然景観が見られますが、それはかつてオホーツクに暮らす人々を苦しめもした、流水を象徴とする厳しい自然環境のたまものでもあります。同時に流水の厳冬期があるからこそ、芽吹き春、育成の夏実りの秋が鮮やかに巡ってくるのです」

流水接岸地域として世界南限のオホーツク沿岸は、世界有数の漁場として知られる。そ

るウイーク」は、網走やオホーツクを全国発信する事業であると同時に、自分たちの足元を見つめ直すためのイベントでもあると考えています(大場市長)

新たな仕組みづくりが求められる 観光交流促進事業

自然環境の変化とはまた別に、オホーツク観光の定番だった流水見物や、夏の快適な気候を満喫するといった従来型の物見遊山の観光も、多様化の時代を迎えて徐々に需要が変化しつつある。

「網走市域はオホーツク海に面しているだけでなく、能取湖・網走湖・リヤウシ湖・藻琴湖・涛沸湖の5つの個性的な湖に囲まれています。湖畔では広大な草原に牛馬が放牧されています。北海道でも格別な牧歌的景観に恵まれています。東側には知床連山・海別岳・斜里岳南には摩周岳・雄阿寒岳・雌阿寒岳。周囲360度のパノラマ景観が楽しめる天都山は道内唯一の景観名勝指定を受け、市域一帯は網走国定公園に指定されています。網走市に限らず北海道の観光はこれまで、こうした天然の観光資源を観光客の皆さまにただ見ていただくことでほぼ成り立っていました。しかし、これからは待つだけの受け身の観光では、多様な価値観を持つ現代の観光客にアピールできません。そこで今、網走市独自の新たな観光の仕組みづくりに着手していると述べています(大場市長)



大場 脩
網走市長

これは流水に付着する豊富な藻類と、水下の海に大量発生するプランクトンのおかげでもある。ところが近年、地球温暖化の流れの中、流水の量や接岸期間が急速に減りつつある。

「平均気温が2℃上昇すれば流水は消滅するというのが流水研究者の定説です。ここ約100年間で網走市の平均気温は0.7℃上昇し、流水の量は約40%も減っています。水は年々薄くなり、今冬の流水接岸期間はわずか7日間でした。先人のたゆまぬ努力と近年の文明の力で、厳冬期にも快適な暮らしができるようになった私たちは、そうした環境変化の裏で何が起ころうとしているのかについてもっと関心を高めるべきです。そういう意味でJR有楽町駅前での『環境と観光を考え

具体的にはエコツアー、グリーンツーリズム、ヘルスツーリズムなどの手法を活用した体験型・学習型プログラムの構築になるが、網走市の場合、内容が網走市ならではの独自性に満ちている。例えば網走市ではオホーツク沿岸に広がるオホーツク文化の代表的遺跡「国指定遺跡・モヨロ貝塚」を中心とする史跡公園の整備を予定している。モヨロ貝塚は古代末期のオホーツクに現れ、約500年間の文化的繁栄を築いてから中世初期にこつぜん姿を消した「謎の民族」「流水の民」ともいわれるオホーツク人の集落跡だ。このオホーツク文化の痕跡を活用した学習型プログラムを構築すれば、網走市でなければ味わえないオ



網走の物産がそろい、流水情報も得られる道の駅「流水街道網走」



世界最南限の流水の海・オホーツクを行く流水観光砕氷船「おーら」



東京農業大学の協力により新たなビジネスモデルを構築中の「エミュー牧場」

網走ブランドの確立と 新産業創出への努力

平均気温の上昇とともに流水は年々薄くなり、接岸期間も不安定になってきているなか、一方で流水を守る事業も始められている。オホーツク地方全域で観光シーズンのホテルの温度調節(夏は高め、冬は低め)をするなどの諸施策を通じ、CO₂削減による温暖化対策「オホーツク流水トラスト運動」を実施しているのだ。効果が形に表れるまでには長い時間を要するが、環境維持についての観光客への啓発、市民の意識の高揚には着実につながるはずだ。それにしても観光振興と環境対策がこ



網走港にて優雅な船体を輝かせる日本最大の豪華客船「飛鳥Ⅱ」

ンリーワンの魅力的プログラムとなるだろう。

体験型プログラムでは、網走市の有する高度なスポーツ施設が生かされる予定だ。網走市は夏のスポーツ合宿地として全国的に有名である。各種目の有名選手や全日本級のチームなども数多く合宿する。体験型プログラムの一つとして、そうしたチームや選手が出場する練習試合の観戦に、周辺の観光ツアーなども組み合わせたロングステイ方式などが考えられている。

また網走湖沿岸には、約50haの市所有農場(旧刑務所農場)がある。この農場の周辺環境はまさに広大なビオトープそのものだ。網走市ではこの農場を市民の憩いの場とするとともに、観光客の農業体験、各種加工体験などのできる場としても整備すべく、現在、さまざまな企画を検討している。

従来は流水観光以外、観光面では活用されることの比較的少なかった網走港も、新たな発想でのリニューアルが着々と進んでいる。「今年1月、冬季には流水観光砕氷船『おーら』への乗降デッキ(おーらターミナル)ともなる、網走港から網走川沿いに少し入った川筋地区に、道の駅を兼ねた『みなと観光交流センター 流水街道網走』をオープンした。また網走港には日本最大の豪華客船「飛鳥Ⅱ」や「つば丸」も毎年入港します。航空機と小樽・網走間のクルーズをセットにした『つば丸』による「飛んでクルーズ北海道」

れだけ密接な関係にある地域も、全国的に珍しい。それは網走市をはじめとするオホーツク地方の風土性が、いかにデリケートな自然環境によって醸成されてきたか、また維持されているかを示す証拠ともいえる。

同様に網走市が昨年スタートした「オホーツク網走ブランド創造事業」も、そんなオホーツクにはぐくまれた、網走市ならではの地場産品を十全に活用するための高付加価値化事業である。

「この取り組みは始まったばかりですが、先駆的な事業として大成功したのがオホーツク産キンキのブランド化です。キンキは全国市場で、ほとんどが煮魚用の扱いです。この需要を拡大しようと5年前に築地の仲買人さんに集まっていただき、刺し身、すし、ゆで、焼き、蒸し...など、多彩な調理法のご紹介と試食会を開きました。その直後から網走産キンキの市場価格は1kg3000円から平均4500円ぐらいに急上昇し、現在も高値安定しています(大場市長)」

同様の手法でブランド化が急速に進んでいるのがカラフトマスである。サケより小型ながら脂の乗りが良いカラフトマスは、地元ではサケ以上に愛されてきた。手始めに今年から友好都市・厚木市のホテルに卸され、優良食材として好評を博している。さらに現在、厚木市内の学校給食用食材として採用されることを目指しているという。

そのほかにも、ブランド化に関しては、完



オホーツク文化の貴重な出土品が展示されている「モヨロ貝塚館」

道」も定着してきました。今後さらに網走港を、オホーツクの広域観光を代表する玄関口として整備していくつもりです(大場市長)

みなと観光交流センターには地場産品売場や飲食施設などが豊富に用意されているだけでなく、オホーツク地方の観光情報、流水情報も気軽に検索できる情報コーナーなどを備えており、早くも網走市の新名所となっている。またセンターと網走川を隔てた対岸には前述のモヨロ貝塚があり、将来的には網走川に橋を架け、両岸を「観光客が回遊できるようにしたい」とも大場市長は語った。

熟したマタタビの菓子食材としての活用など、地域性に富んだ取り組みが行われている。また地場産品のブランド化と並行して精力的に実施されているのが、地元の雇用創出・拡大を主眼とする新産業の育成事業だ。

「この事業で今、力を入れているのが、オーストラリアの国鳥として知られるエミューの飼育と活用です。クジラと同様、エミューにはまったく捨てる部分がなく、さまざまな用途に活用できます。熱帯の鳥でありながら雪も苦にしない強さを持ち、飼育が非常に容易です。」

網走市には東京農業大学オホーツクキャンパスがありますが、農大の先生が市内の業者



人気急上昇中の網走産オホーツクサーモン(カラフトマス)のフィレを揚げたご当地グルメ「オホーツク網走ザンギ丼」



市民の健康づくりのため市職員が考案したカニニョッフ筋体操が目下、大ブレイク中

日照時間も長い。スポーツ合宿には最適だから、もしよかったら法政ラグビー部を誘致しないかと言うのです。それをご縁にスポーツ合宿の誘致事業を行うようになったわけですが、2年目に芝生のグラウンドを整備したことから、3年目にラグビー日本代表が網走で合宿してくれたことが、非常に効果的でした。代表選手が所属チームに帰り、網走市の良さを宣伝してくれたのです」(大場市長)

「中でも当初から関係の深かったラグビー界とのご縁はますます強くなっています。今年2月にはトライ数に応じて各チームと日本ラグビー協会が基金を積み立て、森林保全活動を行う自治体に寄付をする『トライ・フォー・グリーン』

網走市での夏季スポーツ合宿にはラグビー、サッカー、陸上、ボートなど多彩な種目の選手、団体が訪れる。昨年の北京五輪の直前合宿では、男子マラソン代表(3選手全員)、男女各1万m代表選手などが国内最終調整を行ったほど信頼感も高い。夏の平均気温が16〜19℃、日照時間が全国で最も長く、雨が少ないことに加え、第三種公認陸上競技場、総合体育館、プールのほか、ラグビー日本代表チームから「日本の芝生」と評価された6面のグラウンド、16面のテニスコート、野球場、多目的屋内ドームなどを完備した「網走スポーツ・トレーニングフィールド」という優れた施設がある。特にラグビー・トップリーグやサッカー・Jリーグなどのチームにとって、合宿期間中を通じて天然芝生のグラウンドが一面ずつ割り当てられるシステムは非常に喜ばれている。時間の制約なしに練習できるこの網走市独自のシステムも、スポーツ合宿最適の地としての網走市の評価を不動にした要因の一つだろう。



陸上日本代表・長距離陣による北京五輪直前合宿の猛練習

「事業」の第1回目の贈呈先として、網走市を選んでくださったほどです」(大場市長) 網走市ではラグビー協会から贈られた寄付金(125万円)で苗木を買ひ、網走スポーツ・トレーニングフィールドに植樹した。この取り組みは、今後10年程度続けられる見込みである。 10年、さらに20年がたつてこの苗木が大きくなるころには、本欄でこれまでご紹介してきた、網走市の各種活性化事業の成果も、確かな実りの収穫期を迎えているに違いない。(取材・文 遠藤 隆)



合宿中のラグビー・トップリーグ各チームによるオープン戦は真夏の風物詩

網走市ではさらに起業支援策として、起業を希望する人に、スタートアップ補助(30万円以内)、新製品開発を目指す企業への補助(200万円以内)、製品化した商品の販売強化支援(適宜)なども用意している。市内企業が新製品を開発した場合、市が買い取ったテ

に薦めたことにより、十数年前からエミュー飼育が始まりました。私はこれを何とかビジネス化できないかと考え農大に相談したところ、分析研究・加工・販路拡大など多方面への協力をしていただけることになったのです」(大場市長) エミューの飼育と活用は「地方の元気再生事業」として、昨年度、今年度と続けて採択された。主な取り組みは「新規飼育者による飼育実証試験」「孵化およびペアリング適正に関する研究」「エミュー製品の加工製造技術の確立」「エミュー製品のマーケティング調査・販路確立」に分類される。「高タンパク低カロリーの肉は食肉用、卵は料理素材や工芸品用(殻)、肉と皮の間にある脂肪分(エミューオイル)は石けんや化粧品素材として優れています。中でも保湿性に優れたエミューオイルの化粧品は、スポーツマッサージ用にも、アトピー性皮膚炎の方にも保湿性が優れた効果を発揮することがすでに分かっています。網走市としても、この生産・採卵・加工・流通のそれぞれの過程を通じて、雇用の拡大を目指したいと考えています」(大場市長)

合宿誘致事業で深まる スポーツ界との絆

8月、網走市はスポーツ合宿でまち中がにぎわう季節を迎える。網走市のスポーツ合宿誘致事業は昭和63年、法政大学ラグビー部の合宿を受け入れたことから始まった。「当時、網走市の職員だった私のところに、法政大学出身の知人から連絡がありました。その方が言うには夏の網走は気候もいいし、

レビCM枠を活用できる制度もあり、地域産業の活性化にきめ細かな施策を次々と実施している。今後の展開が期待されることだ。



四季を通じてスポーツが楽しめる積雪寒冷地初の空気膜式構造のオホーツクドーム